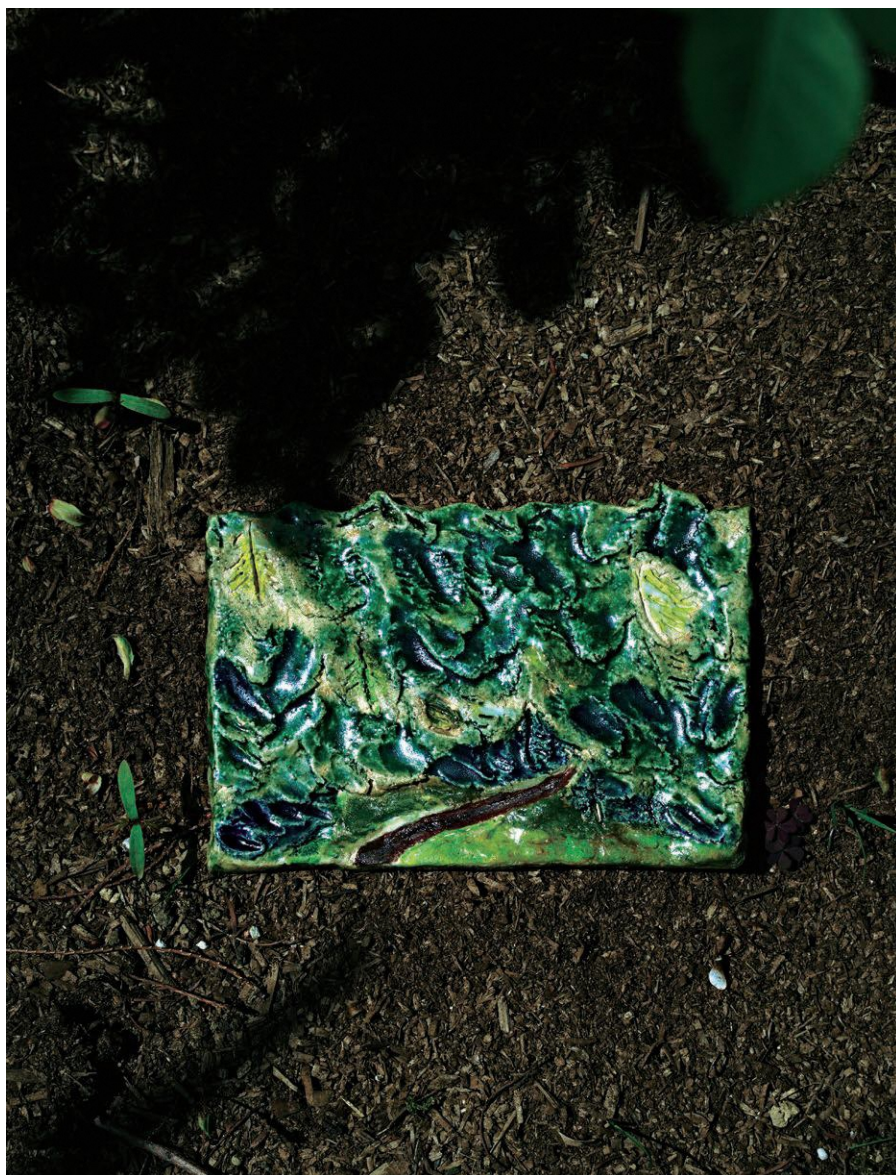


# アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



©エレナ・トゥタッチコワ

エレナ・トゥタッチコワ  
《手のひらの木 #7》  
Trees in My Hands: #7  
セラミック、釉薬  
二〇二二（令和四）年  
九・四×一三・七×一・五cm

〈手のひらの木〉は、作家が実際に経験した風景や想像上の風景をもとに、「その時々心に浮かぶ木」をかたちにしたセラミックのレリーフ作品であり、二〇二一年より継続して制作されているシリーズである。このシリーズの七作目にあたる本作は、二〇二二年二月から三月にかけて、長泉町のヴァンジ彫刻庭園美術館で行われた滞在制作と同時期に作家のスタジオで制作された。本作を含め同美術館での展覧会のために全十二点が制作され、春へと向かい変化する庭園を歩きながら深めた思索や、幼少期の記憶、スタジオへ通いながら考えたことや見た風景などが反映されている。「たねを撒くように」制作したという作家の言葉は、その後、庭園に木を植える行為にもつながっている。こうした制作を通して深められた思考は、昨年新たに収蔵した《たねの季節・クレマチス #1》（五頁）とも響き合う。両作は、生命の循環や場所の記憶を主題とするインスタレーションの一部として、同時に発表された。

（上席学芸員 川谷承子）

No.  
162  
2026年度 | 夏 |

# エントランスホールの変容

館長 木下直之

当館の玄関を入ると天井が低く抑えられ、抜けたとたんに大空間が広がることを、誰かが茶室の「躡口」に喩え、私もなるほどと思った。

茶室では、いったん狭い場所をくぐること、入った四畳半が大きく、それどころか俗世間と切り離された別世界、いや小宇宙にさえ感じられる。すると、左側に用意された三つの展示ケースは「床の間」であり、玄関に至る彫刻プロムナードは「露地」となる。ただし、この喩えでは、奥に控える大階段が説明できない。

一九八六年の開館以来変わらないエントランスホールは、四〇年前の期待される美術館像だ。これほど豪華な大階段は全国でも数少ない。その嚆矢にして最大のものは、東京国立博物館本館の階段だろう。三七年の竣工、すなわち九〇年前の期待される博物館像をとどめている。ただし、玄関を入るとすぐの階段は手前に余裕がなく、窮屈で、無理してるなあというも思う。

それに比べると、六九年に竣工した東京国立近代美術館の階段はよく工夫されたデザインだった。玄関を入るとすぐ右に、ダイナミックに曲がりくねった階段と、奥に踊り場をたどりながらゆっくりと上る階段があった。この両者がまるで非常階段のような貧相な階段に姿を変えたのは、九九年に始まった耐震化のための大改修だった。そのころになると、公共建築ではバリアフリーが優先され、階段はエレベーターとエスカレーターの際に隠れた。

では東京国立博物館の大階段は前世紀の遺物になったかというところ、決してそんなことはなく、フォトウエディング（いわゆる前撮り）の人気スポットと化している。騙されたと思って、インターネットで「東京国立博物館 フォトウエディング」と検索してほしい。この話は終わらなくなるので、「床の間」へと話題を移そう。

三つの展示ケースは「名品コーナー」と呼ばれてきた。開館当時の『年報』

には、こんな説明がある。「名画等を展示し、入館者が作品と気軽に『であい』及び『ふれ合い』の機会が持てる場となるよう展示ケースを三ヶ所（無料）設置する等配慮した」。

「無料」云々がなんだか恩着せがましいが、ともあれ、そこは「名品」あるいは「名画」を展示する場所であった。最初に並んだこれぞ「逸品」は、佐伯祐三《ラ・クロッシュ》、ヴラマンク《小麦畑と赤い屋根の家》、徳岡神泉《雨》である。

ところが、二〇二二年開催の「大展示室」展で、「土足厳禁スリッパ使用」と書いた木の札を展示した。見ていない人には想像もつかないだろうが、決して現代美術の作品ではない。改修工事後の美術作品を展示できない時期（いわゆる枯らし期間）に、展覧会の仕組みを紹介するユニークな展覧会だった。収蔵庫に入る者に注意を喚起する木札は、便器をひっくり返して美術作品に変えたマルセル・デュシャンの《泉》

を思わせないこともなかったが、「名品コーナー」という枠組みだけは揺るがない。だからこそ、意表を突いた面白さがあった。

開館四〇周年を迎えた本年の最初の展覧会で、この枠組みが揺らいだ。いや、あえて揺さぶった。

左のケースには当館のコレクション第一号《天平勝宝四年東大寺写経所請経文》、名品ではあっても名画ではない。当館が美術博物館構想に始まったことの名残りである。真ん中のケースにはクールベ《ピュイ・ノワールの溪流》、ケースの手前に、この絵を立体的に表現した「触図」を置いた。視覚に障害を持つ方が触りながら、絵について語り合う道具である。ガラス越しに名品を凝視する場にとつて、「触図」を載せたふたつの箱は邪魔物以外の何物でもない。右のケースには鈴木康広《地球展開儀》と《ファスナーの船》、会期途中から鈴木さんは身長一八メートルの《空気の人》を持ち込み、膨らませ、エントランスホールいっぱい横たえた。その姿は、まるで人が茶室に寝転んだように見えた。その周りを子どもたちが飛び回る。子どもが遊ぶキッズコーナーも名品コーナーの前に設置したからだ。さしあたって、これが四〇年目の期待される美術館像である。

## 企画展

NHK日曜美術館  
50年展

2026年7月18日(土)～9月27日(日)

美術番組の先駆けとして知られる

NHK「日曜美術館」は、一九七六年四月に始まり今日までに放送回数は二五〇〇回を超えという長寿番組です。放送開始から五〇年を迎えるのを機に、「日曜美術館」のこれまでを振り返り、番組で取り上げてきた多彩な作品や出演者たちの映像をご紹介します展覧会を開催します。以下のような全五章の仕立てで、約一二〇点の作品をご覧いただきます。

第一章 語り継ぐ美 時を超えて美を語る言葉・語らせる作品

第二章 日本美の再発見 古代から明治まで

第三章 工芸 伝統と革新

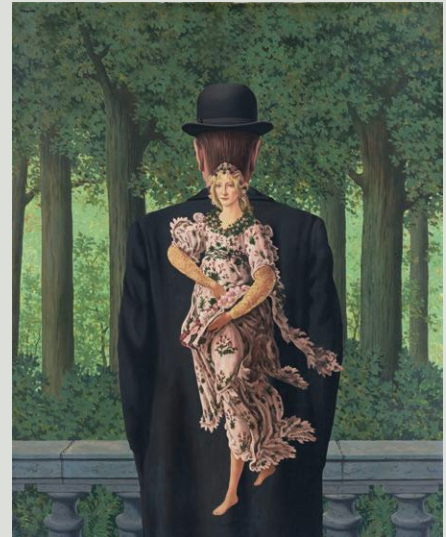
第四章 災いと美

第五章 作家の生き様と美 アトリ

## エ&amp;創作の現場

個々の作品の魅力をお伝えしようとするばかりがありませんが、展覧会全体を眺め渡すとすると、五〇年の間に「日曜美術館」という番組を通して世に示されてきた「いま見るべき美術」、を総覧できるという点に、本展の醍醐味があるのではないのでしょうか。古代から現代まで、幅広い時代とジャンルに及ぶ作品を通して、その一大スペクタクルをお楽しみください。

もうひとつの見どころはやはり、膨大なアーカイブから厳選された貴重な番組映像です。ロダン作品の持つ類稀な力の秘密を彫刻家として伝えようとする柳原義達や舟越桂、三三年の歳月を挟み二度にわたってフランシス・ベーコンを語る大江健三郎など、その言葉はもちろん映像のなかの彼らの姿そのものにも惹きつけられます。曾我蕭白《柳下鬼女図屏風》(八月二十五日～九月二十七日展示)を前にして不意に踊り始める大野一雄も必見。作家がアトリエで創作に没頭する姿を見られるのもま



ルネ・マグリット《レディ・メイドの花束》 大阪中之島美術館蔵

た、特別な体験です。展示室各所でご覧いただく映像は約百分に及びます。ぜひお時間に余裕をもってお越しください。前館長・芳賀徹先生のありし日の姿を見られるのも、静岡県美としてはうれしいポイントです。

さて、当館は約二〇年前の「NHK日曜美術館30年展」の折も巡回の一館として参加しましたが、二〇年前と異なる今回の特徴のひとつは、「災いと美」の章を設けたことです。章の冒頭では疫病をテーマとして西洋の版画をご覧いただきますが、お察しのとおり、この章を設定した背景にはコロナ禍の経験があります。美術館では展覧会が休止を余儀なくされ、テレビの現場では番組制作が



伊藤若冲《仙人掌群鶏図襖》(部分) 重要文化財 大阪・西福寺蔵 ※8/25-9/27展示

ままならなくなる中、私たちは非常に時における美術の意義を考えさせられ、同時に、どうしようもない苦しさや悲しさ、抗いがたく直面する災いと対峙することから生み出されてきた作品の数々を思い起こしました。本章は、不要不急ではないはずの美術の本質について、もう一度思いを巡らせるきっかけになるかもしれません。

半世紀にわたって営々と紡がれてきた、時代と美術と私たちの関わりを、「日曜美術館」の歩みとともにどうぞご堪能ください。

(学芸課長 石上充代)

## 新収蔵品の紹介

開館以来、当館では一七世紀以降の東西の風景画、静岡県ゆかりの作品、国内外の現代美術などの収集方針に基づき、コレクションを拡充してまいりました。二〇二五年度は、購入・寄贈により新たに四十二件の作品を収蔵することが出来ました。

### 〔日本洋画〕

日本洋画では、本県ゆかりの画家による貴重な作品や、日本近代洋画史を語る上で欠かせない作家の作品七点と資料一点を新たに寄贈いただきました。

三島市生まれの洋画家栗原忠二による《白壁の家のある風景》は、一九二三年の年記から滞欧後期と特定できる印象派風の水彩画です。また、静岡市生まれの石川欽一郎の《河畔》は、当館にはこれまで所蔵のなかった日本画のスタイルで描かれており、水彩画家として知られる石川の多面的画業を伝える貴重な一点となります。

野村銀行の重役をつとめた実業家

熊本石造の旧蔵品から、黒田清輝、和田三造、山下新太郎の油彩画がコレクションに加まりました。黒田清輝に師事した和田三造の《牧場の晩帰》下絵は、白馬賞を受賞した彼の出世作（焼失）の画面中央に描かれた牧婦の下絵です。熊本は福岡県立中学修猷館在学中に和田と知り合い、生涯交友をもち続けました。和田の師であり、日本近代洋画の父とも称される黒田清輝の《稲村ヶ崎》と《湘南風景》は、白馬会展出品作の様相や、巨匠の晩年の心境を伝える貴重な小品。和田と同じく黒田の門下生である山下新太郎の《大嶋より眺めたる富士》は、ルノワールに学んだ明るい色彩により静謐で穏やかな富士の姿がとらえられています。

静岡県立中央図書館から管理替えとなった横井弘三の《花籠もてる子供》は、大正洋画史に特異な足跡を残した作家の初期の素朴派的作風を示す大作になります。



和田三造《牧場の晩帰》下絵 1904年

す。資料としては、日本の銅版画界を牽引した駒井哲郎から、同じく銅版画家二見彰一に宛てられた書簡が収蔵されました。一九六九年に開催された二見の初個展に対する批評が綴られており、春陽会における作家たちの影響関係をみることで資料となります。

（上席学芸員 喜多孝臣）

### 〔西洋画〕

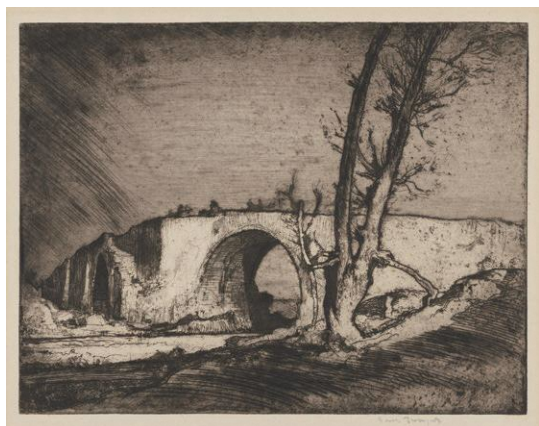
西洋美術の作品は、九件十八点を寄贈頂きました。

一九世紀末から二〇世紀にかけて活躍したフランク・ブラングインは、油彩や壁画、陶器や家具デザインも手掛ける多彩な作家でしたが、下絵から彫版、助手と共に刷りまで行なう版画も制作しています。今回寄贈頂いた《オールド・キュー・ブリッ

ジ》、《アルカンタラの橋》、《サン・シル、熊の親方》、《ブリューージュ、回転木馬》はその好例で、亜鉛版エッチングの特性を活かし、インクの拭き取りの調整によって、画面の空間に奥行きを与えています。職人的な整った線とは異なる、ブラングインならではのタッチをご覧頂けます。

そのブラングインは、浮世絵版画の職人とも共同制作しています。浮世絵師の漆原由次郎は一八八九（明治二二）年に東京で生まれ、二十一歳の時に初めて渡英、ブラングインと共作を開始したのは一九一七（大正六）年頃です。

新たに収集された『木版画十選』



フランク・ブラングイン《アルカンタラの橋》1910年

は、ブラングインが原画を描き、漆原が彫と摺を担当しています。ここでは、ブラングインの自由なタッチが忠実に再現されていますが、浮世絵木版による色面表現が巧みに配され、精密なキアロスクーロのような味わいがあります。

ブラングインは他にも日本と深い関係があり、川崎造船所（現川崎重工業）の初代社長で国立西洋美術館コレクションの基礎を作った松方幸次郎との交流が有名です。

オーギュスト・ドラートルの《月の出》、シャルル・エミール・ジャックの《風景》は、いずれも一九世紀のヨーロッパの版画家たちが備えていた高い技量を示しています。特にドラートルの作品は、ドライポイントによる描線の豊かさ、インクの拭き取りの丹念さによって、月影を映す水辺の夜景を静かに描き出しています。

ケーテ・コルヴィッツの《子どもをめぐって争う死と女》は、堅実な技量に支えられた強烈な表現で、見る者を強く引き込みます。当館のコルヴィッツ作品は、これで二点になりました。

（上席学芸員 新田建史）

## 「現代美術」

現代美術では、作品二点を購入し、二十三点をご寄贈いただきました。

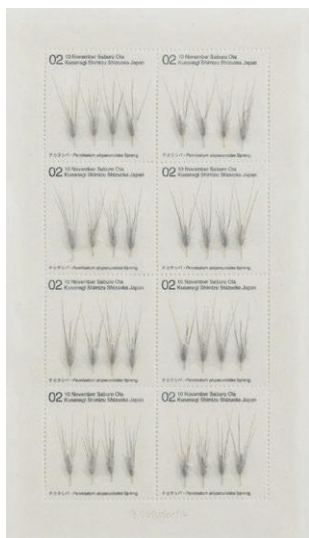
まず、購入作品のエレナ・トゥタツチコワ氏の写真作品をご紹介します。トゥタツチコワ氏は、ヴァンジ彫刻庭園美術館で開催された企画展「Flower of Life 生命の花」（二〇二二年四月二三日～一二月二五日）への出品作品の滞在制作のため、同年二月から三月にかけて長泉町を三回訪れました。作家は滞在中、渡り鳥の姿や植物の変化など、庭園の生態系と人間との共存のあり方を考察



エレナ・トゥタツチコワ 《たねの季節：クレマチス #1（クレマチスガーデン、2022年3月）》、2022（令和4）年

し、場の音に耳を澄ませ、経験したことをセラミック、ドローイング、写真、映像など、多様な媒体を用いて表現しました。《たねの季節…クレマチス #1（クレマチスガーデン、2022年3月）》は、美術館の庭で咲いたクレマチスの花びらが落ちて、種をのぞかせている様子をとらえています。同館は二〇二三年九月に閉館し、美術館としての活動に幕を下ろしましたが、自然はなお循環を続け、場所や種はその後もあり続けます。本作には、この場所に積み重ねられた活動が人々の心に蒔いた「種」、そしてこれらの種から新たな芽がでる未来への可能性に寄せる作家の思いが込められています。

（上席学芸員 川谷承子）



太田三郎 《SEED PROJECT from SHIMIZU  
チカラシバ・Pennisetum alopecuroides Spreng.  
2002年11月10日 清水市草種 ed.1/3》  
2002（平成14）年

また、旧清水市で虹の美術館を運営されていた評論家の本阿弥清（本波潔）氏より、太田三郎の作品二十三点をご寄贈いただきました。いずれも同館で開催された個展に出品されたもので、作家による旧清水市での調査や制作プロセスに基づくものです。太田は切手をモチーフとした作品で知られており、今回の寄贈作品にも、植物の種子を和紙に封入して切手形にしたものや、お茶の種や葉、三保の海岸で見つけた石や砂などの写真を元に作った切手形のものなどがあります。《Stamp-map of Shimizu 31 March 2003》は、旧清水市が合併する前日である二〇〇三年三月三十一日の市内郵便局各局の消印が付いた実物の切手を、地図上の各局の位置に貼りつけた作品です。個展の際はインスタレーションとして展示スペースの壁面に直接展示

されましたが、二〇二四年に額装作品として仕立て直されたものです。これらの作品は、当県の土地や美術の動きを伝えるものと言えます。

（上席学芸員 植松篤）

# 狩野常信筆「五福神図巻」(個人蔵) に関する 一考察

上席学芸員 薄田大輔

昨年度の当館研究紀要にて、狩野探信守政筆「雑画貼交屏風」(静岡県立美術館蔵)を考察した際に<sup>1</sup>、註釈にて触れた狩野常信筆「五福神図巻」(図1)を紹介したい。常信は狩野探幽次弟の尚信の息子として寛永十三年(一六三六)に生まれ、木挽町狩野家(当時は竹川町)二代目当主となり、探幽とその末弟である安信の歿後、狩野派を牽引した絵師である。晩年、宝永元年(一七〇四)に法眼、同六年に法印に叙されるが、その四年後の正徳三年(一七二三)に歿した。

本図巻は二巻からなり、材質は絹本、法量は縦が各三七・〇センチ、長さ上巻が四四四・〇センチ、下巻が四五三・〇センチである。画題は上巻に福祿寿、大黒天、下巻に弁財天、毘沙門天、恵比寿を描く吉祥図であるが、同様に福德の神を題材とする場合、常信筆「七福神図巻」(山種美術館蔵)や息子・常信筆「七福神図巻」(板橋区立美術館蔵)のように、当時既に成立していた七福神信仰に拠って、七福神が揃う形式で描かれるのが一般的である。つまり、当初は七福神図巻であったが、何らかの理由で本紙が切られた可能性がないわけではない。しかし、本図巻の長さは上下巻とも同程度であり、画面にも切断された痕跡はない。

さて、画題と伝来で興味深いのが、薩摩の島津氏に関する史書『西藩野史』巻之十九、享保六年(一七二一)六月二十

八日の記事である。ここには「吉貴公太刀時服二十代金十兩及正宗太刀利休カ茶器力將軍二綿百把養朴カ五福神ノ畫圖ヲ家宣公夫人天英院ニ献ス」とあり、薩摩藩四代島津吉貴から六代將軍家宣正室・天英院(近衛熙子)へ「養朴(常信の号)」の「五福神ノ畫圖」が献上されていることがわかる。常信歿後から、あまり時代が降らない記事であり、やはり五福神図という画題が当初よりあった可能性を窺わせる。そもそも、仮に当初は七福神の画巻であったとしても、最上位の人物への献上品に、切断され吉祥モチーフが欠けたほぼ同時代の絵師の作品を選ぶだろうか。「五福神ノ畫圖」が卷子装か否かは不明だが、本図巻と共に当初から五福神の図巻であり、両者は関連しているのではないだろうか。

本図巻の表装を確認すると、表紙には「白茶地葵紋松牡丹鶴七宝文錦」、八双には葵紋と唐草文を透彫りした赤銅金具(裏面の見返し側は魚々子地唐草文毛彫)が付き、軸首には象牙の寸切形に葵紋が彫られる。また、見返しや総裏紙(裏面)にも青金、赤金の砂子が蒔かれ、切箔や野毛まで散らされる。さらに、現状は三重箱に納められており、内箱は総梨子地で装飾された軸台にもなる収納箱(図2)で、蓋表には「五福神 福祿壽 大黒 辨財天 毘沙門 恵比寿 狩野養朴筆」と金粉字形で記され、やはり紐金具には葵紋

が彫られるといった格別の誂えである<sup>2</sup>。ただし、本図巻の伝来が確実に辿れるのは『東京榛原氏所蔵品入札』(東京美術倶楽部、大正六年十一月)に「常信極彩色五福人唐子遊 梨子地葵紋付箱入」と掲載されているのみである。

では、本図巻を島津家伝来の「五福神ノ畫圖」とみるならば、島津家自体は葵紋の使用を許されていないため、家宣歿後も七代將軍家継の後見にあたるなど、権勢を振るっていた天英院への献上を機に、表具や収納箱が豪奢に誂えられたと想定できる。むしろ、葵紋を使用した家は將軍家、御三家と御三卿に加え、会津、高松、越前松平家などの家門(連枝)、外様でも加賀前田家、鳥取池田家が許されるなど、意外と多い。そのため葵紋のみで本図巻を「五福神ノ畫圖」と同定することはできないが、梨子地という内箱の仕様からもう少し所ユーザーを限定できるかもしれない。婚礼調度では、万治・寛文期(一六五八〜七三)頃から調度品の蒔絵の仕様は厳しく統制され、將軍家や一部の大身の大名以外は梨子地を使用することは許されなかったと考えられている<sup>3</sup>。さらに江戸時代中期には、將軍家、御三家、御三卿に嫁した正室のみが使用できる格別の仕様となっていた<sup>4</sup>。絵師に加え、「五福神」という珍しい画題で一致し、葵紋尽くしの表装だけではなく、梨子地仕様の収納箱兼軸台という最高級

の誂えであることから、両作品が同一であった可能性は否定できない。本図巻の八双金具や表紙の裂の葵紋は十八世紀前半の意匠としても齟齬はない。ちなみに、常信は最晩年の法印時代では、款記に「養朴」ではなく「古川史」と書すことが多い。しかし、『西藩野史』をはじめ、幕府の公的記録、また大名、公家、寺社の日記や道具帳類には常信晩年や歿後であっても殆どが「養朴」と記されている。そのため、梨子地の収納箱蓋表に「養朴」とあるが、常信存命中（法印以前）に軸箱が制作されたという根拠にはならない。

では、絵画表現をみていこう。五福神の顔貌は総じて細くしなやかな線で繊細に描かれ、衣文線は張りのある謹直な線描で、フォルムを的確に象っていく。樹木や岩は力強い墨線で縁取られ、樹皮では墨の濃淡を巧みに使い分けてその質感を表し、岩では皴を執拗なまでに重ねて重厚に表現する。探幽とは異なる線描主体になった典型的な常信様式である。常信や岑信に「七福神図巻」が遺されているように、このような福德神を題材とした図巻は、大名家の慶事のため、多く制作されたであろう。量産（定番化）されるということは、やはり工房による

分業制作という性格が強くなっていくはずである。本図巻も、この長大で描写密度が高い画面を下描きから彩色に至るまでの全てを、常信ただ一人が手掛けたとは考え難く、竹や太湖石など、一部の添景モチーフには平板な表現も見受けられる。しかし、多く描かれた唐子をみても、その手や顔には朱隈を思わせる薄桃色の絵具が僅かに輪郭に沿って入れられ、身体 of 立体感が表されているなど、細部にいたるまで非常に丁寧に描写される。堅実かつ重厚な常信様式をよく示し、描写も優れた本図巻は、ハレの空間を荘厳した常信の大名道具の典型的かつ代表的な作と位置付けられよう。本図巻は来年度の当館展覧会で公開する予定である。



図1-1 狩野常信「五福神図巻」并財天部分



図1-2 狩野常信「五福神図巻」毘沙門天部分



図2 「梨子地軸箱」

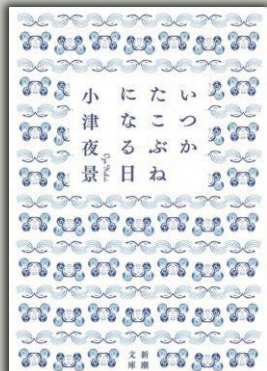
- 1 拙稿「狩野派の雑画帖制作背景に関する試論―狩野探信守政筆「雑画貼交屏風の紹介を兼ねて」―」『静岡県立美術館紀要』2012 令和八年三月
- 2 中箱は黒塗で、蓋表には金漆で「五福神之絵 二巻」とある。
- 3 小池富雄「名古屋蓬左文庫蔵「梨子地額に二八文字紋散八重梅鉢唐草蒔絵書物簞笥」について」『金鏡叢書』第一八輯、徳川黎明会、平成三年三月
- 4 高橋あけみ「大名家の婚礼について」『大名家の婚礼―お姫様の嫁入り道具―』仙台市博物館 平成十二年三月
- 5 ただし、軸首の葵紋のみ、葉が大きく隙間がないやや時代が下の図巻に見えるため、後世に付け替えられた可能性がある。

## 本の窓

小津夜景著

『いつかたこぶねになる日』

新潮文庫 二〇一三年



返り点や字数など決まりごとばかりの漢詩は堅苦しい。そんな先入観を、縦横無尽な選曲（あえてこの言葉を使いたい）と、親しみやすい現代語訳で覆してくれるのが本エッセイ集です。漢詩ならではのリズムや修辞、用事（和歌という本歌取りの技法）を読み解く語り口も分かりやすく、独特の雅趣にいつしか魅了されていました。デュシヤンから平安貴族が詠んだ水の景色へ、ヌーデリストとの遭遇から夏目漱石の葉の花の詩へ、マティスも通った洋菓子店から「江戸名物詩」へ―思いも寄らない連想によって詩の世界へといざなわれていきます。著者が住む南フランスの情景もときに差しはさまれ、あまりに目まぐるしい気もしますが、そんな飛躍こそが詩の効用なのかもしれません。

（上席学芸員 貴家映子）

## 好きをチカラに

美術館に配属されて二年目を迎えました。新卒で入った昨年度は分からないことはばかりで、目の前の業務を覚えることに精一杯でしたが、現在少しずつ仕事にも慣れ、美術館という場所の魅力や役割について考える機会が増えてきました。

実は、学生時代までの私は美術に特別詳しくはなかったわけではありません。小学校から大学までバスケットボールに打ち込み、今でも休日はバスケットボール観戦を楽しむなど、どちらかといえばスポーツ中心の生活を送っていました。そのため、美術館への配属が決まったときは不安も多くありました。しかし、展覧会の準備や運営に携わる中で、多くの職員や関係者の努力によって美術館が支えられていることを知り、この仕事の面白さを感じるようになりました。

今年度は当館にとって開館四〇周年という大きな節目の年です。言ってしまうと、たまに運良くここに居られている私ですが、そのような記念すべき年に当館の一員として働



2025年12月31日 東京ドーム

## 企画総務課 川口真歩

くことができることを、とても光栄に感じています。この歴史の一部に関われることに感謝しながら、日々の業務に取り組んでいきます。

そのような縁もあり、この一年は特に広報に力を入れていきたいと思っています。私自身、普段から応援しているアイドルで、現在静岡県一五〇周年記念事業のアンバサダーを務める松村北斗さんの発信をきっかけに、改めて情報発信の持つ力を実感することがあります。もちろん、一職員の私にそのような影響力はありませんが、美術館には素晴らしい作品や企画だけでなく、訪れて初めて気づく発見や楽しさがあること、その魅力をどう伝えれば「行ってみよう」と思ってもらえるのか、広報担当として日々考えながら取り組み、そして一年前の私のように「なんとなく気になつて来てみたら楽しかった」と思っていただけの人を少しでも増やせるよう、挑戦していきたいと思っています。

バスケットボールの試合・イベント運営然り、推しの発信然り、私の身の回りには美術館での仕事に還元できることがたくさんあるな、と最近気がつきました。好きなことを誰かでも仕事に生かすことができること、すごく幸せに思います。まだ二年目で学ぶことはたくさんありますが、静岡県立美術館の魅力を一人でも多くの方に届けられるよう、好きなことを力に変え自分にできることを常に探していきたいと思います。

## 利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)

休館日：毎週月曜日(月曜祝日・振替休日の場合は開館、翌日火曜日休館) 年末年始

※詳細はウェブサイト等でご確認ください。

## アクセス

◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分

◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分

◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分

◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2

企画総務課／Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767

学芸課／Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



## 静岡県立美術館

Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

## 今年も開催します！

## 夏休みは「こども創作週間」へお越しください。

日時：7月18日(土)～20日(月・祝)、8月11日(火・祝)～12日(水) 10:00-16:00

対象：高校生まで(小学3年生以下は保護者同伴でご参加ください)

会場：当館実技室

申込不要

さまざまな材料、道具、アイデアが集まった実技室をこどもたちに開放します。好きな創作活動をするもよし、コンクールの絵を描くもよし、探求学習のタネも見つかるかも！お気軽にお越しください。

※制作に使用する材料・道具は、原則、持参となります。持参する私物には必ず名前を書いてください。

※12:00～13:00はスタッフはお休みですが利用は可能です。

## わたしたちは、静岡県立美術館開館40周年を応援しています

〈コアサポーター〉

IAI  
Quality and Innovation

A アイワグループ

Shizu  
tetsu  
術に在るを。人にとけき。

Hagoromo はごろもフーズ

村上開明堂

〈サポーター〉

Suzuyo